

オープンカレッジに取り組む中国地方の大学間交流

京 俊輔（島根大学）・薬師寺明子（美作大学）

キーワード オープンカレッジ、中国地方、大学間交流

【趣旨】

島根大学では、学生らが中心になり 2007 年にオープンカレッジ実行委員会を立ち上げ、2008 年 10 月から 2 年を 1 期とする「知的に障害のある人のオープンカレッジ in 松江」（毎年度秋・春 2 日間ずつ開講）を開講している。2018 年 10 月に 6 期目のオープンカレッジが始まっている。美作大学でも 2013 年度から発達障害のある高校生を対象とした就労準備プログラム「オープンカレッジ in 美作大学」を、2015 年度からは地域の知的障害者を受け入れ、1 年を 1 期として年 2 回開講するオープンカレッジ「きんちやい みまさかれっじ」をそれぞれ開講している。

本研究では、両大学のオープンカレッジの取り組みとオープンカレッジをテーマに掲げた大学間交流、とくに 2018 年度の交流を中心に実践報告をするとともに、両大学の学生がグループワークを通じて検討した交流の意義を報告する。また、この活動を展開していくための課題を検討する。

【概要】

1. 各大学のオープンカレッジの概要

（1）島根大学「知的に障がいのある人のオープンカレッジ in 松江」

島根大学では、2007 年度に法文学部社会文化学科福祉社会コースの学生や松江市社会福祉協議会、松江市手をつなぐ育成会らが「オープンカレッジ実行委員会」（以下、実行委員会）を立ち上げ、2008 年 10 月から 2 年を 1 期とした「知的に障がいのある人のオープンカレッジ in 松江」（以下、「オープンカレッジ in 松江」）を島根大学松江キャンパスにて開催している。毎年の開催時期は 10 月と 3 月であり、それぞれ 2 日間ずつ開講している。全体講義、選択講義（講義系科目、実習系科目、演習系科目から 1 つ選択）、交流会、校外学習（毎年 3 月に実施）を組み込んだプログラムを用意している¹⁾（写真 1、2）。

2018 年 10 月には第 6 期の「オープンカレッジ in 松江」を開講し、21 名の新規受講生を受け入れたところである。これまでのべ卒業生数は約 120 名である。受講生の年齢は 18 歳から 60 代まで幅広い。受講生は、松江市、出雲市、安来市、雲南市など島根県東部の市から通ってきている。現在の実行委員会は、人間科学部福祉社会コース京研究室内に設置されている²⁾。



写真1 オープンカレッジ in 松江の集合写真



写真2 交流会の様子（音楽活動）

（2）美作大学「オープンカレッジ in 美作大学」・「きんちやいみまさかれっじ」

美作大学では、2013 年度に美作大学生活科学部社会福祉学科薬師寺明子研究室とおかやま発達障害者支援センター県北支所が協働し、年2回（前期2日、後期2日）開催する就労準備プログラム「オープンカレッジ in 美作大学」に取り組んでいる。対象者は、発達障害のある普通高校に通う高校生である。「働くことを知る・学ぶ」を目的とし、2日間使い、講義、グループワーク、実習に取り組んでいる（写真3、4）。



写真3 オープンカレッジ in 美作大学の講義



写真4 実習の様子

また、2015 年度からは、これとは別に薬師寺明子研究室の学生が中心となり企画・運営する、地域の知的障害者を対象としたオープンカレッジである「きんちやい みまさかれっじ」を1 年を1 期として年に2 回開催している。「きんちやい みまさかれっじ」は、「学習の機会をもってもらふこと」を目的に「防災学」「津山の歴史」などの講義を用意し、受講生が講義で得た知識や経験を基に、地域で生き生きとした生活を送れるようになることをめざしている（写真5、6）。



写真5 きんちゃい みまさかれっじの授業

写真6 きんちゃい みまさかれっじの講義

2. 大学間交流の実際

島根大学、美作大学両大学の交流は2014年度から始まり、2018年12月現在計6回実施している(表●)。2018年度は7月に2日間(@美作大学)、9月に2日間(@島根大学)の2回計4日間実施した。会場は島根大学と美作大学のキャンパスで交互に開催してきた。

表1 2大学間交流の経過

開催日	場所	備考
2014年10月4日・5日	島根大学	島根大学 15名・美作大学 6名
2015年11月27日・28日	美作大学(OC参加)	島根大学 6名・美作大学 13名
2016年3月5日・6日	島根大学(OC参加)	島根大学 多数・美作大学 4名
2018年7月15日・16日	美作大学	島根大学 6名・美作大学 多数
2018年9月14日・15日	島根大学	島根大学 6名・美作大学 4名

2018年7月の交流会は、島根大学、美作大学の活動内容の報告とそれに基づく意見交換をした(写真7、8)。前半で美作大学の学生が「オープンカレッジ in 美作大学」「きんちゃいみまさかれっじ」だけでなく、同じ美作大学の学生による地域に対する障がい理解の取り組みである「美作福祉部隊 リカイヒロメタインジャー」、全国の障害福祉サービス事業所の製品を取り寄せ、大学で販売する「Smile Company」³⁾の取り組みをそれぞれ紹介した。後半は島根大学の学生が「オープンカレッジ in 松江」の取り組みを紹介した。その後それぞれの報告内容に対して質疑応答を行い、両大学の取り組みに対する理解を深めるだけでなく、課題となっていることなどを確認しあった。交流2日目の7月16日は祝日だったが、美作大学では通常授業を実施していたため、2年次生から4年次生が入れ替わりながらの報告会になった。質疑応答とその後の意見交換は活発に行われ、

当初予定していた終了時間を過ぎてもお質疑が終わらないくらいの熱気を帯びた交流になった。



写真7 活動報告の様子①



写真8 活動報告の様子②

9月の島根大学で開催した交流会は、平日開催であったものの長期休業中だったため、途中で授業のある学生が入れ替わるなかでの実施となった。前半は昼食を一緒に取り、そのあとで島根大学学生が大学内を案内し、どのような場所で「オープンカレッジ in 松江」を実施しているのかを説明した。後半は2グループに分かれて、「オープンカレッジを実施する大学同士が交流することの意義」をテーマにグループディスカッションを実施した（写真9、10）。グループディスカッション参加者は、島根大学学生は4年生3名、3年生1名の計4名、美作大学は3年生4名であった。いずれも島根大学、美作大学で学生スタッフの中心として活躍している学生たちであった。



写真9 グループディスカッションの様子



写真10 交流会参加者の記念撮影

【結論】

(1) 交流の効果

グループディスカッションを通じてそれぞれのグループで出された意見は、①オープンカレッジ

の活動内容、②オープンカレッジ以外の活動、③スタッフの活動している範囲、④プレゼンテーション方法、⑤お互いの大学に対する印象、⑥お互いの学生生活に対する印象の6点に整理することができた。なお、以下の学生の意見の末尾に付している（ ）は記入した側の大学名である。「 」は、学生から出されて意見の抜粋である（一部筆者が加筆）。

①オープンカレッジの活動内容の確認

「オープンカレッジの活動内容の確認」は、それぞれの大学で取り組まれている内容や、スタッフの取り組みを確認しているものであった。「オープンカレッジの規模が大きい（美作）」「自分たちで考えた活動と先輩から受け継いだ活動を両立している（美作）」「活動を自分もやりたいと言って入学してくる学生がいる（島根）」という意見が含まれていた。

②オープンカレッジ以外の活動の確認

「オープンカレッジ以外の活動の確認」は、学生スタッフがオープンカレッジ以外で広く取り組んでいる活動を確認しているものであった。「リカイヒロメタインジャーの劇の内容がしっかりしている（島根）」「薬師寺先生の学会について行って勉強しているに驚いた（島根）」など、特に島根大学学生から美作大学の取り組みに対する意見が多く含まれていた。

③スタッフの活動している範囲の確認

それぞれの大学の取り組みを通じて、学生スタッフが多方面とつながっていることを確認したのが「スタッフの活動している範囲の確認である。「大学外、地域に出て活動している印象を受けた（島根）」「障害のある人の事業所とのつながりがあるのに驚いた（島根）」「多くの学科の人と一緒にやっているのがすごい（美作）」という意見が挙がっていた。

④プレゼンテーション方法の評価

交流を通じて学生たちはお互いに「プレゼンテーション方法の評価」をしていた。「プレゼン力があると思った（島根）」「プレゼンテーションがとても上手だと思いました（島根）」「紹介するのが難しいと思った（美作）」という意見が挙がっていた。

⑤お互いの大学に対する印象

それぞれの大学のキャンパスで交流を実施していることを通じてそれぞれが学ぶ環境に対する感想が述べられていたのが「お互いの大学に対する印象」である。主に美作大学の学生から「大学の大きさに驚いた（美作）」「学内が広すぎて大変そう（美作）」「博物館があってびっくりした（美作）」「大学に動物がいた（美作）」という感想が述べられていた。

⑥お互いの学生生活に対する印象

学生による取り組み以外の大学生活を知る機会になっていたのが「お互いの学生生活に対する印象」である。「他大学の学生の卒業研究を知ることができていい刺激になった（美作）」「他大学の学生生活について知ることができた（島根）」「自主的に勉強している姿勢が素晴らしいと思った（島

根)」という意見などが挙がっていた。

(2) 大学間交流の意義と今後の課題

これらの結果から、学生にとって、大学間交流をすることは、オープンカレッジのことだけでなく、お互いの大学の様子や学生生活を知る良い場面、授業の組み立て方や内容等を確認する機会、お互いの強みや課題を明らかにする機会、自らの取組を振り返る機会になっていたといえよう。これらが本研究の結果明らかになったオープンカレッジを実施する大学生同士の交流の意義だと言える。ただ、これまでの交流は各大学での取組を紹介することに過ぎなかったことから、今後は「準備段階における困難な場面」「当日運営の際に感じた困難」などテーマを絞った話し合いを設けることも試みたい。これらの交流を経て改めて交流の意義を問い直す必要があるだろう。

このような交流事業を継続することは、それぞれの大学におけるオープンカレッジの質向上に寄与する可能性があると考えられる。しかしながら、学生同士の交流であることから、大学の授業等が開催の可否に影響を及ぼすため、毎年開催および交流活動を継続することそのものが課題となっている。また物理的に距離が離れていることもあり、企画を担っている全ての学生が一堂に会するのは難しい。その結果、訪問する側の学生の参加人数が限られてしまうため、リーダークラスの交流になりがちになってしまっていることも課題である。

【注】

- 1) 「知的に障がいのある人のオープンカレッジ in 松江」のより詳しい活動内容は、Facebook のページを参照頂きたい。(<https://www.facebook.com/open.college.matsue/>)
- 2) 2017 年度に島根大学に人間科学部が新設されたのに伴い、福祉社会コースはそれまでの法文学部から人間科学部に移っている。
- 3) 美作大学の学生が取り組む「美作福祉部隊 リカイヒロメタインジャー」および「Smile Company」の活動内容は、美作大学生生活科学部社会福祉学科のホームページを参照頂きたい。(<https://mimasaka.jp/undergraduate/welfare-field/social-welfare>)

【参考文献】

- 京俊輔 (2017) 「知的に障がいのある人のオープンカレッジ in 松江の取り組み—学生スタッフにとつての意義を中心に」『障がい者障害学習支援研究』 1,34-39.
- 薬師寺明子ほか (2017) 「実践報告『オープン・カレッジ“きんちゃい みまさかれっじ”』」『美作大学紀要』 50,63-72.
- 薬師寺明子ほか (2016) 「発達障害者を対象としたオープンカレッジ 1 : 発達障害者における就労準備支援プログラムの実践」『美作大学・美作大学短期大学部地域生活科学研究所所報』 13,43-45.